

B. 生徒指導に関する研究

自主性を生かした生徒指導のあり方を求めて

鈴木洋一郎 中野 満男 米山 誠 徳井 輝雄
服部 晴子 白井 宏 米田 閏一 山田 雄一
斉藤 真子 今治富美子

〔I〕 教科外活動の指導について

米 山 誠

1. 教科外活動の教育的意義と 指導上の問題点

学校生活の中で、生徒たちの姿が最も生き生きと私の目に映るのは、文化祭・体育祭・遠足などの行事や部活動のときである。教科外活動、とりわけ生徒の自主性によって進められる諸活動を通じて、授業中には思いもよらないような、生徒それぞれの個性的、積極的な側面を見出すことが多い。

名大附属中学・高校の生徒が、学校生活の中で、何に対して最も大きな興味・関心をもっているのかを調べたところ、中学・高校とも、第1位は「友人・交友」、第2位は「文化祭・体育祭等の諸行事」であった。中学生は、第3位「部活動」、第4位「授業・学習」と続き、高校生は、第3位「授業・学習」、第4位「進路」と続くのである。(註P.40「教科外活動に対する生徒の意識」参照) また、生徒たちの日常の会話、例年の卒業式での送辞答辞の類、卒業後の集まりでの思い出話、などにおいても活気のある話題は、やはり教科よりも教科外活動に関することが多いようである。以上のようにしてみると、生徒相互、生徒・教師相互の人間関係をもふくめて、教科外活動の体験が、生徒個々の人間形成にとって大きな意義をもつことを感じずにはいられない。

しかしながら、教師間において、たとえば文化祭、林間学校などの行事、部活動の指導に際して、教科の指導だけでも手一杯なのに、その上なぜ、こんな性格のはっきりしない、しかも多忙な活動につき合わされなければならないのか、あるいは、こんなことに生徒

たちの労力や時間を費させるより、もっと教科の学習に専念させるべきではないのか、というような疑問が出されることが往々にしてある。すなわち、これらの教科外活動が、はたして十分に教育的意義・価値をもつものであろうか、無駄な遊びに過ぎないのではないだろうかという懸念があり、あらためて、学校教育の中での教科外活動の本質的性格を問題にし、討議し合わなければならないような実態があるわけである。

さて、ここで教科外活動の目標を確かめてみることにしたい。『中学校学習指導要領』の「特別活動」には、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達を図り、個性を伸長するとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」と記され、『高等学校学習指導要領』の「各教科以外の教育活動」には、「望ましい集団活動を通して豊かな充実した学校生活を体験させ、自律的、自主的な生活態度を養うとともに、民主的な社会および国家の形成者として必要な資質の基礎を育てる」と記されている。こうした目標は、「学校教育法第36条（中学校教育の目標）」「同第42条（高等学校教育の目標）」を実現するためのものであり、その根底に、「教育基本法第1条（教育の目的）」の「人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっぴ、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」の精神が踏まえていることは明白であろう。

学校教育の中で、教科指導は知識・技能を体系的に習得させることを主な目標とし、教科外活動の指導は、

自主的、集団的な活動を体験させることを主な目標とするものであろう。そして、教科学習と教科外活動とを関連させ、相互に影響を及ぼし合えるように指導を展開するのが本来の形と考えられる。また、ホームルーム、生徒会、学校行事、クラブ(部)が、具体的な活動の領域であるが、それぞれの性格と機能をもつ集団活動を、できるだけ有機的に結合させることによってはじめてよい効果をあげるのである。

以上、教科外活動の教育的意義について述べたが、実際の指導に当たっては、いくつもの困難な問題に直面する。次に、二・三の問題点をあげておきたい。

○高校入試・大学入試の影響

受験体制の下では、成績中心の教科指導に重点が置かれ、教科外活動は軽視されやすい。たとえば、従来の大学入試の改善をめざして、54年度から実施される予定の共通一次テスト案が発表された頃、多くの高校において、その対策として、学校行事の実施時期などをむりやり変更しようとするような状況が見られた。これなどは端的に受験体制の異常な影響を物語っているといえよう。こうした空気は、必要以上に生徒の心理に不安と動揺を与える。生徒は、テスト勉強や塾通いに追われ、教科外の集団活動を怠りがちになる。こうして議会、委員会、部などの活動が不活発になっていく。指導上必要なことは、責任を自覚させることと同時に教科学習と教科外活動とを両立しうるように生徒個々に対して配慮することである。

○部活動の位置づけ

生徒にも教師にも大きな影響をもつ活動であるにもかかわらず、現在の学校教育の中で位置づけが不明確であるのは、部活動である。必修クラブが設けられて以来、あいまいな立場に置かれたままである。施設、経費、教師の時間外労働、顧問の責任などが常々問題となる。今後、早急に部活動の役割、指導の方法、責任の所在が明確にされる必要がある。なお、部活動中の事故発生の際、その責任問題、被害者救済問題は深刻である。学校災害の補償体制が確立されなければならない。

○生徒の自主性と教師の指導性

生徒の自主性を育てるということは、教育の基本的な目標でありながら、実にむずかしい仕事である。自主性尊重の名の下に、生徒会などを放任すると、集団活動は停滞、又は無秩序化する。そして全校に無気力な空気が漂うようになる。自主的な活動が不活発になり、生徒の生活態度が乱れてくれば、教師の一方的、管理的な指導が強まり、その結果、教師・生徒間の相

互不信や対立の関係を生じ、教科指導をもふくめて学校を荒廃させることになりかねない。

結局、教師集団が自主的活動の指導理念をきびしく確認し、協力し合って、生徒集団と共に、諸活動を成功させていく努力が最も重要であり、そのことによって、教師・生徒間に信頼関係が確立されるわけである。なお、活気と秩序のある自主的活動を展開させるためには、確固たる指導理念にもとづくきびしさが必要である。それは、生徒たちをして自分の所属するホームルーム、部、学校等愛させ、内面的な規律を自覚させるものでありたい。

2. 教科外活動に対する生徒の意識

以下は、名大附属中学・高校の生徒指導研究グループが、教科外活動に対する生徒の意識を知るために行なったアンケートの結果である。

○調査の対象生徒

・名大附属中学生徒 118名(全生徒数の約半分)

$$\left\{ \begin{array}{l} 1 \text{ 年生 } 42 \text{ 名 (男子 } 22 \text{ 名} \cdot \text{女子 } 20 \text{ 名)} \\ 2 \text{ 年生 } 40 \text{ 名 (男子 } 19 \text{ 名} \cdot \text{女子 } 21 \text{ 名)} \\ 3 \text{ 年生 } 36 \text{ 名 (男子 } 19 \text{ 名} \cdot \text{女子 } 17 \text{ 名)} \end{array} \right.$$

・名大附属高校生徒 86名(全生徒数の約1/5)

$$\left\{ \begin{array}{l} 2 \text{ 年生 } 43 \text{ 名 (男子 } 23 \text{ 名} \cdot \text{女子 } 20 \text{ 名)} \\ 3 \text{ 年生 } 43 \text{ 名 (男子 } 23 \text{ 名} \cdot \text{女子 } 20 \text{ 名)} \end{array} \right.$$

○調査の実施時期 — 1977年10月28日

○集計の結果は、中学・高校それぞれ、学年・男女の別を問わず、単純に合計し、そのパーセントだけを示した。

(1)「あなたは現在、学校生活についてどのように感じていますか。」

	中 学	高 校	
ア 非常に楽しい	8%	3%	} 37%
イ かなり楽しい	57%	34%	
ウ あまり楽しくない	8%	18%	} 31%
エ 全然楽しくない	6%	13%	
オ わからない	21%	32%	

「楽しい」「楽しくない」の理由および、中学から高校になると、「楽しい」が減り「楽しくない」が増えることの理由については、(2)の「学校生活における興味・関心」の結果と関連づけて考えることにしたい。

(2)「学校生活において最も興味・関心のあることは何ですか。次にあげたものの中から選びなさい。

(イ)授業・学習 (ロ)友人・交友 (ハ)部・サークル活動 (ニ)必修クラブ活動 (ホ)生徒会活動 (ヘ)ホームルーム活動 (ト)文化祭・体育祭等の学校行事 (チ)進

路 (リ) その他 (ヌ) 特になし

(中 学)

① 友人・交友	29%
② 文化祭・体育祭等の学校行事	24%
③ 部・サークル活動	15%
④ 授業・学習	10%
⑤ 必修クラブ活動	7%
⑤ 特になし	7%
⑦ ホームルーム活動	4%
⑧ 生徒会活動	2%
⑧ 進 路	2%

(高 校)

① 友人・交友	26%
② 文化祭・体育祭等の学校行事	20%
③ 授業・学習	15%
④ 特になし	13%
⑤ 進 路	10%
⑥ 部・サークル活動	8%
⑦ ホームルーム活動	4%
⑦ 必修クラブ活動	4%
⑨ 生徒会活動	1%

中・高を通じて、第1位「友人・交友」、第2位「文化祭・体育祭等の学校行事」となっているが、諸行事や部活動が交友関係を広くし深める機会になっていることと深く関連しているであろう。「生徒会活動」に対する興味が低いのは、執行部役員や各専門委員の仕事が、半ば公的に義務づけられた奉仕的活動の性格のゆえであろうか。なお、中学で「進路」への関心が低いのは、本校においてはほぼ中・高一貫の形をとっていることによると思われる。

(3) 「生徒会、部、学校行事などの諸活動について、それぞれどの程度必要性を感じますか。」

① 生徒会

	中 学	高 校
A 絶対又は大いに必要	51%	59%
B 少しは必要又は不必要	19%	22%
C わからない	30%	19%

注 以下、A・B・Cと記号のみで示すこととする。

② 部・サークル

	中 学	高 校
A	64%	76%
B	12%	8%
C	24%	16%

③ 必修クラブ

	中 学	高 校
A	63%	48%
B	19%	28%
C	18%	24%

④ 文化祭

	中 学	高 校
A	69%	71%
B	6%	10%
C	25%	19%

⑤ 小文化祭

	中 学
A	43%
B	16%
C	41%

⑥ 体育大会

	中 学	高 校
A	71%	69%
B	13%	15%
C	16%	16%

⑦ 修学(研究)旅行

	中 学	高 校
A	81%	78%
B	5%	11%
C	14%	11%

⑧ 林間学校

	中 学	高 校
A	83%	81%
B	2%	8%
C	15%	11%

⑨ 春の遠足

	中 学	高 校
A	72%	62%
B	7%	15%
C	21%	23%

⑩ 秋の遠足

	中 学	高 校
A	73%	60%
B	6%	21%
C	21%	19%

⑪ 営火祭

	高 校
A	52%
B	21%
C	27%

⑫ 三年生を送る会

	中 学	高 校
A	46%	24%
B	24%	34%
C	30%	42%

中・高別に必要感の高いものから順序に並べてみると下の表ようになる。

なお、必要性を感じる主な理由としては、「交友を深めることができる」が最も多い。

部・サークル、必修クラブは「学年を超えた縦の友人関係」、文化祭・体育大会などは「クラスの団結・協力」があげられる。文化祭については、特に「生徒自身による計画・実行」「自主性が発揮され、活気がある」というものが目立つ。しかしながら、一方で

順位	中 学	高 校
1位	林間学校	林間学校
2位	修学旅行	研究旅行
3位	秋の遠足	部・サークル
4位	春の遠足	文化祭
5位	体育大会	体育大会
6位	文化祭	春の遠足
7位	部・サークル	秋の遠足
8位	必修クラブ	生徒会
9位	生徒会	営火祭
10位	三年生を送る会	必修クラブ
11位	小文化祭	三年生を送る会

は、文化祭・小文化祭・体育大会などについて「授業がなくなるから」というものがかなりあることも事実である。

(4) 「あなたは自分が生徒会・部・諸行事の活動にどの程度、参加、協力していると思いますか。」

	中 学	高 校
A 非常に積極的	12%	12%
B かなり積極的	49%	41%
C 消 極 的	9%	23%
D 無 関 心	7%	6%
E わからない	23%	18%
	(61%)	(53%)
	(16%)	(29%)

○D・Eの主な理由は、「集団活動がきらい」「教育的意義がわからない」などである。

○A・Bの場合、どう感じているかについては、下の表にみられるように、全生徒中の過半数の者が中・高とも活動に積極的に参加し協力したと自覚しており、また、その中の多数の者がその経験を有意義なものであったと感じているわけである。

	中 学	高 校
イ 非常によい経験だと思う	22%	23%
ロ かなりよい経験だと思う	41%	35%
ハ 少しはよい経験だと思う	29%	37%
ニ 無意味に思う	3%	0%
ホ そ の 他	5%	5%

(5) 「あなたは本校の生徒会活動の現状についてどう思いますか。」

① 執 行 部

	中 学	高 校
A 非常に又はかなり活発	30%	26%
B 少し活発又は全く不活発	35%	41%
C わからない	35%	33%

注 以下、A・B・Cと記号のみで示すこととする。

② 生 徒 議 会

	中 学	高 校
A	34%	30%
B	29%	30%
C	37%	40%

④ 生 徒 集 会

	中 学	高 校
A	42%	22%
B	25%	43%
C	33%	35%

③ ホ ー ム ル ー ム

	中 学	高 校
A	49%	32%
B	20%	45%
C	31%	23%

⑤ 文 化 委 員 会

	中 学	高 校
A	72%	80%
B	5%	4%
C	23%	16%

⑥ 体 育 委 員 会

	中 学	高 校
A	46%	55%
B	16%	11%
C	38%	34%

⑧ 図 書 委 員 会

	中 学	高 校
A	28%	40%
B	28%	20%
C	44%	40%

⑩ 保 健 委 員 会

	中 学	高 校
A	36%	26%
B	22%	23%
C	42%	51%

⑫ 新 聞 委 員 会 (報 道 局)

	中 学	高 校
A	40%	30%
B	20%	27%
C	40%	43%

⑦ 生 活 委 員 会

	中 学	高 校
A	33%	18%
B	22%	36%
C	45%	46%

⑨ 厚 生 委 員 会

	中 学	高 校
A	39%	43%
B	17%	15%
C	44%	42%

⑪ 放 送 委 員 会 (放 送 局)

	中 学	高 校
A	57%	45%
B	10%	23%
C	33%	32%

中・高を通じて最も活発に活動していると認められているのが文化委員会であり、生徒会主催の自主的行事としての文化祭に対する半年がかりのとりくみの努力が一般生徒によく理解されている。これに対して執行部は、前・後期それぞれ、生徒会行事をはじめ部・サークル活動等全生徒にかかわる問題の解決のために日常、献身的に努力しているにもかかわらず、一般生徒にはあまり理解されていない。

上記の各項でC(不活発)の原因としてあげられていた主なものは次のようである。

- 「何をやっているかよくわからない」「情報不足」
- 「委員会(生活委員会など)により、仕事が少ない。定期的な会合もない」
- 「議会の回数が少ない」「議員の発言が少ない」「議員が怠ける」
- 「自主的活動に対する生徒の自覚が欠けている」
- 「教師に諸活動が管理されている」

(6) 「今後、生徒会でとりあげてほしい問題(学校への要望をふくめて)がありますか。あったら、なるべく具体的に書いてください。」

この質問に対して、「ある」と答えた者は、回答者の約1/3であった。その内容を、中・高別に記してみよう。

(中 学)

- 早朝の生徒集会(月曜日以外の)をやめてほしい。
- 集会でのラジオ体操はやめた方がよい。

- 生徒議会を定期的に関け。
- 議題を生徒から出させよ。
- 議題をはっきりと予告せよ。
- 生活指導をもっときびしくしてほしい。
- 生徒会の情報を活発にしてほしい。
- 新聞や生徒会誌をきちんと発行してほしい。
- 遠足時服装の基準を設けよ。
- 遅刻とりしまりにおいて学年による差別をするな。
- 校内美化にとりくめ。
(高 校)
- 諸施設を新しく設けてほしい(クラブハウス、食堂など)。
- 体育大会、遠足などの行事を生徒に計画させよ。

- 生徒各個人に合った自由選択の多いカリキュラムを考えてほしい。
- 制服問題、女子夏服問題を再考せよ。
- 校内美化をすすめよ。
- 盗難防止の対策を考えてほしい。
- 部活動強制化にきりかえるべきだ。
- 金大附高との競技会を復活させよ。

以上が、教科外活動に対する生徒の意識の調査結果である。大雑把な調査ではあるが、本校における教科外活動の実態がかなり浮き彫りにされている。今後のよりよい指導のための反省資料としたい。

〔Ⅱ〕 部活動の指導について

徳 井 輝 雄 伊 藤 三 洋

1) はじめに

前報①にひきつゞき本校における部活動の指導状況を生徒会の動きを中心に述べ、若干の考察を加えたい。

部活動が生徒の学校生活の中で占める位置はかなり重い。わが生徒指導研究グループが本校で昭和52年10月に行った調査では次のようになっている。学校生活において最も興味の深いものや関心の高いものを10項目の中から3つ選びなさいという質問に対して、中学生では、①友人・交友 ②文化祭等学校行事 ③部・サークル活動 ④授業・学習 の順になっており、高校生では、①友人・交友 ②文化祭等学校行事 ③授業・学習 ④進路 ⑤部・サークル活動 となっている。いずれも部活動は興味や関心の強いものとなっている。また部活動の必要性を尋ねたところ資料1に示すように、中・高校生の7割が必要性を意識している。

このような生徒の意識があるにもかかわらず、学校生活全体では生徒が自主的かつ集団的に活動する場がすくないのが現状である。故に、部活動をはじめとする種々の課外活動が教育上大きな意義をもつことになる。ところが、教育現場では、教科指導中心主義が根強い。ため、このような課外活動に対して本腰が入っておらず、また本腰を入れるにも入れにくい事情が存在している。とくに部活動に対しては、「部活動は社会教育へ」という声をはじめとして、教師が強制的に部顧問を引き受けさせられることへの疑問、土曜日の午後や日・祝日や休暇中等の負担、さらに、活動中のけがに

対する刑事民事の責任問題等があり、生徒の要求に十分答えられないでいる。教師が部活動を指導する上でこれら負の条件に加えて、部活動に対する教師と生徒の間の意識上のずれが存在し、それがこれら負の条件を教育的情熱で克服できにくくしていること等を前回指摘した。

本報告では、西ドイツや中国における課外活動への取り組み方を日本と対比させ、かつ、学校教育において部活動を積極的に取込んでいく場合の指導組織のあり方および部運営の理念や方法について述べていきたい。

2) 自主的な部活動を支える 指導組織とその運営

青少年の自主的な課外活動をどう支えるかは、その国の教育に対する考え方と密接に関係している。

日本の教育現場では昭和48年の必修クラブ導入にともない、部活動を含めて課外活動に対する考え方が揺れ動いている。その中で台頭している部活動は社会教育へ移管しようという考えは、学校とは知育だけを行う所という立場に立つものである。これは西独や米国の道を歩もうとするものである。一方学校と社会と家庭が一致協力して共に知育、徳育、体育をやろうとしている例の一つに中国が挙げられる。

(1) 西ドイツと中国における課外活動の位置

筆者等がそれぞれ訪れた西ドイツと中国で得られた情報をもとに、そこでの教育の在り方を課外活動の側